

## 榎法華(とどほっけ)における言語と風習 : 失われゆく伝統(2)

その他(別言語等)のタイトル	Endangered Dialect and Tradition in Todohokke(2)
著者	島田 武, 橋本 邦彦, 寺田 昭夫, 塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	53
ページ	87-97
発行年	2003-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/89">http://hdl.handle.net/10258/89</a>

## 榎法華(とどほっけ)における言語と風習 : 失われゆく伝統(2)

その他(別言語等)のタイトル	Endangered Dialect and Tradition in Todohokke(2)
著者	島田 武, 橋本 邦彦, 寺田 昭夫, 塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	53
ページ	87-97
発行年	2003-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/89">http://hdl.handle.net/10258/89</a>

# 楳法華（とどほっけ）における言語と風習－失われゆく伝統(2)

島田 武\*1, 橋本邦彦\*1, 寺田昭夫\*1, 塩谷 亨\*1

## Endangered Dialect and Tradition in Todohokke(2)

Takeshi SHIMADA, Kunihiko HASHIMOTO,  
Akio TERADA and Toru SHIONOYA

(原稿受付日 平成 15 年 5 月 6 日 論文受理日 平成 15 年 8 月 29 日)

### Abstract

This article is the second report of urgent survey on the Todohokke Dialect, which is considered one of the endangered dialects in Japan. The present study describes phonetic properties and gives a presentation of vocabulary and folkloristic customs in Todohokke to preserve its linguistic features and other precious heritage and tradition.

keywords: Todohokke dialect, devoicing, vocalization, standardization, folklore

### 1 序論

平成 12 年 7 月に道南渡島東岸部方言調査の研究チームを発足させて以来、亀田郡楳法華村での言語調査を継続して行ってきた。著しい共通語化の波により伝統的な方言の消滅への危機が更に高まっている中、この種の調査研究の緊急性と重要性はより一層増しているものと考えられる。従って、現地での録音・記録の収集作業は今後も持続的かつ緊急に進めていかなければいけない作業である。今記録しなければ失われてしまうかもしれない貴重な方言の記録及び分析作業が言語学上極めて重要であるのはもちろんであるが、近年、言語調査を行う言語学者

に対して、言語調査の成果は十分に地元へ還元できるように努力せよとの要求が内外の学会等でも高まっている。それに答えるためにも、本稿は方言調査から得られた言語学的な成果を示すことばかりでなく、地方の貴重な遺産である方言を地元の人々がアクセスできるような形で残すという目的も考慮している。カタカナ表記の資料、及びその標準口語訳を用意したものはそのような用途にも供するものである。

### 2. 談話テキストと覚書

以下で、第1回調査で記録された談話テキストを掲載する。これは、約70分の CD 録音のうち前回発表しきれなかった後半部分である。<sup>(1)</sup> 橋本が最初に音声資料

\*1 共通講座

を基にカナ表記し標準語訳したものを、寺田(七飯町出身)、丹治(松前町出身)両名がチェックし修正した。カナ表記はあくまで北海道南部出身者の聴覚印象によったので、厳密な音声情報に関しては、付録(Appendix)に挙げた IPA 音声記号による表示資料を参照していただきたい。

## 2. 1. 樞法華村第1回方言調査談話記録(後半):

### カタカナ表記と標準口語訳<sup>(2)</sup>

- 01 タドエバ ホレ ムガシ アノ コゴサネ アノ エーガ  
たとえば ほれ 昔 あの ここにね あの 映画  
クルンデスヨ エーガネ  
がくるんですよ 映画がね
- 02 ソイエバ ハダモチツテネ シトリガフタリシテ  
そういえば 旗持ちって行ってね 一人か二人して  
ハダモツワゲナンサ  
旗を持つわけなんですよ
- 03 ノ ソイデ ハダモツテ ムラジュ コ アルゲンダ  
ね それで 旗を持って 村中を こう 歩くんです  
ヨネ ムラジューアルグワゲダ  
よね 村中を歩くわけです
- 04 デ ソイドギ ホレ ケン ニメーダニメー サン  
で そういうときに ほら 券を 二枚なら二枚 三枚  
メーダサンメー ケルワゲナノセ  
なら三枚 くれるわけなんです
- 05 ダケ<sup>ト</sup> サンマイモラツタラ サンニンヨリハイレ  
だけども (券を)三枚もらったら 三人以上は入れ  
ネーベシ  
ないでしょう
- 06 ソイダカラ ホレ ナガマガイテ ホレ ノ ションベン  
それだから ほら 仲間がいて ほら ね 小便をしに  
シニデテイグインタフリコイデー ホレ ノ ウラドアゲ  
行くようなふりをして ほら ね 裏の戸を  
デハ ハイッテ マダミデデモネ ベヅ  
開けて 入って また(映画を)見ているね 別に  
ニマダ アノー オゴリモンネーダヨ ノ  
また あの 怒ることもしないんだよ ね
- 07 タダ ソーユーノ ナンチュンガ ノダガチュ  
ただ そういうのを どう言ったらいいのか のどかっ  
ンダガネ ソーユー ヤツパリ フーシューワ  
て言うんですかね そういう やっぱり 風習がありま  
アツタネ  
したね
- 08 コドモノゴロノアソビツテユエバネ アノー ヤツパリ  
子供の頃の遊びっていうとね あのう やっぱり  
ヤマサイツテ ハダトリダノ  
山へ行行って 旗取りですね
- 09 ハダトリ ハダツテ シノマルノハダトガ アノー アイ  
旗取り 旗って 日の丸の旗だとか あのう あ  
ダ  
れだ
- 10 ウンダ ソンデ コツチャコレネーヨーニシテ  
そうだ それで こっちの方へは来れないようにして  
マー タドエバ オレダチノバーイデアレバ トサンダ  
まあ たとえば 私たちの場合であれば どうさん  
チノバーイデアレバ ノ オナジサギデモ ココモト  
たちの場合であれば ね 同じ岬でも ここは元  
ムラツテドゴダシ ココカラニキロクライイツタドゴニ  
村っていう所ですし ここから二キロメートル行った所  
トミーラツテドゴアルンスヨ  
に 富浦っていう所があるんですよ
- 11 デ トミーラアダリモ フタテニ ヤツパリワガレデアル  
で 富浦あたりでも 二手に やっぱり分かれてあ  
ワゲダベシ マ シトブラクデアツテモネ デ  
るわけなんでしょう ま 一部落であってもね で  
コツチノダンタイド コツチノダンタイド ワガレデ  
こっちの団体と こっちの団体と 分かれて  
ハダトリスルワケダベシ  
旗取りをするわけなんですよ
- 12 ウン マズイネ ソイデ マダ チョンドイノハラアル  
うん まずね それで また ちょうどいい野原があ  
ンダ ミンナシテ ホレ カマモツテツテ シラツヲ  
るんだ みんなで ほら 鎌を持って行って さら地  
ツクツテサ シラ シラ ノ ワガルデシヨ  
をつくってさ さら さら ね わかるでしょ
- 13 マー ソイデ チョンドイーイスアルンダベスイ  
まあ それで ちょうどいい石があるんですよ  
ソイデ チャントハダタデデオグワケセ  
それで ちゃんと旗を立てておくわけです
- 14 デ コツツィノダンタイワ コツツィノダンタイデモツテ  
で こっちの団体は こっちの団体でもって  
モーソーユードゴデ ウンドーカイモヤルインタ  
もうそういう所で 運動会もやってもいいよう  
ハー  
なんです(広さのこと)
- 15 ミンナアズマツテ アレ コサウンダ グランド  
みんな集まって あれ こしらえるんだ グランド  
ツクルワケヤベシ  
つくるわけなんですよ
- 16 ソイデ ホレ コツツィトソツツィノホード ノ ツカイシト  
それで ほら こっちとそっちのほうと の 使いの  
リ イタリキタリシテ ノ デ コノー ホレ  
者がひとり 行ったり来たりして の で このう ほら

- ヨグケンカコグンダ ウンダヨー  
よく喧嘩をするんだ そうなんですよ
- 17 ソゴトーセバ ソッチノホーノハダトラレルベシ マ  
そこを通せば そちらの方の旗を取られるでしょう ま  
ダ ソッチコッチトーセバ ソッチノハダトラレルベシ  
た そちらこちらを通せば そちらの旗を取られるで  
ノ  
しょう の
- 18 ソイデ ホレ ヤマニイッデ ハダトリシテ デ アソ  
それで ほら 山に行つて 旗取りをして で 遊ん  
ンデ テンデニミヲツテノ ソイデ マー  
で 好き勝手に木の実を取つてね それで まあ  
イエサカエル マー ソーユーアソビダネ  
家に帰る まあ そういふ遊びだね
- 19 イヤベツニネーノ  
いや別にないね
- 20 マー オソラグ オラダチワ マー ソンナモンダネ  
まあ おそらく 私たちは まあ そんなもんだね
- 21 マー アメフバ ジンジャサハイテノ マノリヤル  
まあ 雨が降れば 神社に入つてね 馬乗りを  
クライナモンデ パッチヤルクレーナモンデ  
やるくらいなもんで めんこをやるくらいなもんで
- 22 ホトソッド イマンドコデワ  
ほとんど いまのところでは
- 23 マズ アソビーッテバ パツツイカ オミヤサイッテー  
まず 遊びといえは めんこか お宮に行つて  
ウマノリダノー  
馬乗りだねえ
- 24 ナンモ オナゴサー ノー カーサンダチモ  
なんも 女の人たちは ねえ かあさんたちも  
ガクセイデモ ケッコーヤツタッテ キイデダネー  
学生でも 結構やつたつて 聞いていました  
ねえ
- 25 タイソーバデ ヤスミジカンナレバネ  
体操場で 休み時間になればね
- 26 ツナガッテッテ ウスイロカラ コッコハネデイグワゲ  
つながつていて 後ろから こんな風にはねていく  
ダベセ  
わけです
- 27 アスピーッテナ ウマノルクレナモンダナ  
遊びつていえば 馬乗りするくらいなもんですね  
ウマノリガ パツツイガ  
馬乗りか めんこか
- 28 ソーユーノ ネーナー キイダゴトネーナー  
そういうのは ないですねえ 聞いたことがないで  
すねえ
- 29 ウチノムゴガネー イワテケントーノガラキテルン  
うちのむこがねえ 岩手県の遠野からきてるんで  
ダワ  
すよ
- 30 マズイネ ソイデ オレモ ホレ イマユータ コー  
まずね それで 私も ほら いま言った こうい  
ユーオハナシ スキナモンダカラ ネー アノー  
うようなお話が 好きなものですから ねえ あのう  
ヤナギダクニオトーノモノガダリオンデ イッカイ  
柳田国男の『遠野物語』を読んで 一回  
イクセーイクセートオモッタダケヤ ネー オガノム  
行こう行こうと思っていたら ねえ 自分の娘  
スメトーノオムゴサンド イッシュニナッチマツタン  
と遠野のむこさんとが いっしょになったんだも  
ドモノ マー ソレガイッテサ ズイーブン イマ  
の まあ それがいいってさ ずいぶん いま  
ノ カッパモノガダリダトカ イロイロナソーユーモノ  
ね 河童物語とか いろいろなそのような物  
ガダリアルケド トドホッケニワ ソーユーモノ  
語がありますけれど 楳法華村には そのような物  
ガダリワ ネーナー  
語は ないですねえ
- 31 ザシキワランソゴト ノー ザシキワラシニナッチマウ  
座敷童子のこと ねえ 座敷童子になってしまう  
ケド キイダゴトネーナー  
けれど 聞いたことはないですねえ
- 32 ウン ソレワ アルアル  
うん それは ありますあります
- 33 チョット カーサンドハナシシテフトンズイデ コイデ  
ちょっと かあさんと話をするのと同じで これで  
シントアダイデクレバナ アノー アイダ アノー  
ヒントを与えてくれればな あのう あれだ あのう  
イマユートーリ アノー アガシヤクノ  
いま言う通り あのう (船の)水をかき出すひ  
アガシヤクフタツモッテイグンダトセー  
しゃくをね 水をかき出すひしゃくを二つ持つていく  
んだそうです
- 34 アガカグ アノシヤク アノカグヤツネ  
水をかき出す あのひしゃく あのひしゃくやつね
- 35 ソイデ コンド アノ アイダ ホレ ヤマギシノ  
それで 今度 あの あれだ ほら 山岸の  
ジーカラ キイダンダイナー  
爺さまから 聞いたんだよなあ
- 36 オイダー ホレ アノ サワラッテドコデ フナダイク  
俺たち ほら あの 砂原っていう所で 船大工の

- ミナライニイッテタンダワ  
見習いに行っていたんですよ
- 37 ホイデ ソコデ ホレ ウチデフネツクッタワゲナン  
それで そこで ほら うちで船を作ったわけなん  
デー  
で
- 38 デモ トドホッケマデ カレコレゴロッキロアルモンダ  
でも 榎法華まで かれこれ五、六キロあるもんだ  
カラネ オナジアカシヤクデモネ アノー フタツモデ  
からね 同じひしゃくでもね あのう 二つ持て  
バイインダテ シドツワ ホレ ソコヌイデ  
ばいいんだそうです 一つは ほら 底を抜いて  
シドツワ ソノー アガシヤクモッテ ウン  
もう一つは その ひしゃくを持って うん
- 39 ソイデ ホレ アガシヤクカセツチャーラネ  
それで ほら ひしゃくを貸せって言われたらね  
ソゴヌイダヤヅカシテヤレバ コンダミズハイネンダ  
底を抜いた方を貸してやれば 今度は水が入ってこ  
テ オレダチサワラニイテ ハレ コサエ  
ないんだって 私たちは砂原にいて ほれ (ひしゃ  
クを)こしらえて こしらえたおぼえがあるから  
デ コサエダオボエアルモンシタツテ
- 40 アガカグノ フツーアガカグテバ  
水をかき出すの 普通水をかき出すっていえば  
アノアイダ ココーナッテツツイデー ココカグンダ  
あのあれだ こうなって突っついて ここでかき出  
ケド ネ シテ ケツノホー イダウ  
すんだけどね そして (柄の)端の方で 板を  
ダネンデヤッタモンダー  
打たないでやったもんだ
- 41 ソーユーアレワアルケドー マー オラダチ チョクセ  
そういうあれはあるけれど まあ 私たちは 直接ね  
ツネー モー オラダチノダイワ ショーワジュー  
え もう 私たちの世代は 昭和十  
モノオボエツイダノワ ジューネンカラネ ジューニサ  
物覚えがついたのは 十年からね 十二、三年  
ンネンナッテイグカラ タイシターマダー ネ  
になっていくから [話題転換] ね  
ドーリョクセンガネ ドンドン ホレ コーデギデルカラ  
動力船がね どんどん ほら こうできているから  
マー イマンドゴデワ ソーユーノ キイダゴト  
まあ いまのところでは そういうのは 聞いたことは  
ネーナ  
ありませんね
- 42 オレ コネンダモナ ウチノカーサンニイッタモン  
わたしは この間も うちのかあさんにも言ったん
- ダケドモ ナンガムカシンノオッカネーハナシダトカ  
だけど 何か昔のこわい話だとか  
ネ ナケバヤマカラモーコクルトガテ ソ  
ね 泣けば山からモーコが来るとかいった そう  
ソイサ ツイテユグノネーカテ カンズィ ハナシ  
それさ 似ている話がないかって いろいろ 話をし  
シテダ  
ていたんですよ
- 43 ワガル ワガル オーオー  
わかる わかる おうおう
- 44 イマチョット コーキガレデモナー  
いまちょっと こんな風に聞かれてもなあ
- 45 マー アソビダバネ アノ イロイロアツタネ  
まあ 遊びならね あの 色々ありましたね
- 46 マジ オレモ マッ コゴサカイダケドネ  
まずわたしも まっ ここに書いておいたように  
イマ タマイレダガッテ ココーコーヤルンダイネ  
いま 玉入れとかいって こうこんな風にやるんで  
す
- 47 アノ アイダ ケンダマ ケンダマテーノガ  
あの あれだ けん玉 けん玉っていうのですか  
アレネ オレラチャッコイドギ ニツィゲツボールツテ  
あれね 私たちが小さいときに にちげつボールと  
ネ  
いってね
- 48 ニツィゲツボールチューンダワ ノ ナ アレサ  
にちげつボールっていうんですわ の ね あれは
- 49 ソイカラ タケデモッテ ヨンボンツクッテサ ネ ソイ  
それから 竹でもって 四本作ってさ ね そ  
デ バットコーマグンダイナ  
れで ぱっとこんな風に撒くんですわ
- 50 ソスバ ホレ アレ アノ ノ マイデ アレ  
そうすれば ほら あれ あの ね 撒いて あれ  
ヨンボン コーアレシテ コンド コッチノシトワ  
四本を こんな風にあれして 今度 こちらの人は  
コゴサ タゲ コー サンボンハイレバ コッチ  
ここに 竹を こんな風に 三本入れば こちら  
ノシトガラサンボントルニイシィ ノ ソーユードギニ  
の人から三本取れるし ね そういうときに
- アノ アイダ オレ ナンボオモイダシテモ ナガナ  
あの あれだ 私は いくら思い出しても なかな  
ガダセネンダヨナ  
か思い出せないんだよね
- 51 イチニーサンシーツテ コーイワネーデ  
一、二、三、四って こんな風には言わないで

- イツイゴノショーガラ ナット ムクレダケナンテ  
越後の塩辛 納豆（皮の）剥けた竹の子な  
ズィーットノコノ アノ アソコンドコノ ニーガダ  
んて ずうっとこの あの あそこの所の 新潟の  
ノネ アノ サンジョーダトカ ズィーットデデクンダヨ  
ね あの 三条だとか ずうっと出てくるんです  
ネ  
よね
- 52 ウンダ イツイゴノニーガタ サンジヨトガ コーヤッテ  
そうだ 越後の新潟 三条とか こうやって  
ヨ デ オイ ナンジューネンモ コレ ホレ ヤッテ  
よ で おい 何十年も これ ほら やって  
ネーモンダカラネ  
ないもんだからね
- 53 アレ タゲッコアソビ アルンダワ  
あれ 竹っこ遊びが あるんですよ
- 54 キット アンタガタワ ソーユーノ ミタコトアルベモン  
きつと あなたがたは そういうの 見たことあるはず  
キト  
だ きつと
- 55 コーイッテ タゲコーヤッテ コーヤッテ コーオモデ  
こういって 竹をこうやって こうやって こう表なら  
ダラ オモデデタリ ウラダラ ウラデダシトガ  
表が出たり 裏なら 裏を出した人が  
コンド マダコーヤリニークテ ソイデ コンド  
今度 こうやりにいって それで 今度  
コレサ コンド アノ タゲ マダ コツツイマダジツパリ  
これを 今度 あの 竹を まだ こっちはまだたくさ  
モツテルカラ ホイデ ミセデヤツタンダワ  
ん持っているから それで 見せてやったもんですよ
- 56 ソイデ ドツツイガコーショーハイガ アノ キマレバ  
それで どちらかのこう勝敗が あの 決まれば  
イチゴノニーガタ サンジョー ムクレダケナンダトカ  
越後の新潟 三条 （皮の）剥けた竹の子  
コレヤツパリ アノ トーマデアルンダワ  
だとか これがやっぱり あの 十まであるんですよ  
コレ  
これが
- 57 ウンダ ウンダ カゾエウタミタイナヤツ  
そうだ そうだ 数え歌みたいなやつです
- 58 ホトンドネー オソラク シーセンゴナーナツテカラ  
ほとんどねえ おそらく 終戦後になってから  
ホトンド モー イマ アノ ジジノダイドー  
ほとんど もう いま あの じいさん(本人)の代と  
ノ モ ゼンゼーチガウカラネ モー シーセンゴデ  
ね もう 全然違うからね もう 終戦後に
- ナンモ ホトンドーナグナツトオナジューモ  
なって何もかも ほとんどなくなったのと同じようなも  
ンダネ コレ  
んだね これは
- 59 セーカツニオワレデキテルカラ ホレ  
生活に追われてきていますから ほら
- 60 ソーダ ソーダ  
そうだ そうだ
- 61 ホレ オライデナカッタラ コーヤッテナラベテ ホレ  
ほら 私の家でなかったら こうやって並べて ほら  
ウンウンッテ アンタ チャントミデダノカ  
うんうんって あなた ちゃんと見ていたんですか  
ソレ タイショーネンカンノ アントキ  
それ 大正年間の あのとき
- 62 デ コイツワ アノ ウスイロノホーサ オラ エーゴヨ  
で こいつは あの 後ろの方に 私は 英語が  
メネエカラ オラノ アノ エーゴガッコサイツテル  
読めないの私 あの 英語学校に行っている  
ノ ザーットヨンダキャ アノ メーズイオンジューサ  
のが ざっと読んだら あの 明治四十三年の末  
ンネンノスイエッコダツタカ ウン ソトギダベサ  
あたりだったか うん その時でしょう
- 63 ネ コレモ ホレ イマイッタ モノズキダカラ ホレ  
ね これも ほら いま言った 物好きだから ほら  
ノ ンデハ モーイッカイネ ガッコーサモイッテキ  
ね でそれで もう一回ね 学校へもっていき  
テートオモツテルンダ  
いと思っているんだ
- 64 タダ ガッコーアダリデ モノアツベデ ネ イマユー  
ただ 学校あたりで ものを集めてね いま言う  
トリー ウンウンタツテ ホレ オレミテエアダ  
通りに うんうんて言ったって ほら 私みたいに頭  
マイーモンダワカルダデ ミナアダマノワ  
のいい人ならわかるでしょうけれど みんな頭の悪い  
ルイモンバカリイダドモ チャントカイドゲバ チョッ  
人たちはばかりだから ちゃんと書いておけば ちょ  
トサミレバ セイトサン コーワガルデショ  
っと見れば 生徒さんが こうわかるでしょ
- 65 デ イヅダカ アノ アツ キューニ ヘンナハナ  
で いつだったか あの あっ 急に 変な話をし  
コイダラ オゴラーレデシマウナ ソイデ アルドキ  
たら おこられてしまうな それで あるとき  
ヤヤ トーサン イッカイガッコーサキテー シツカリ  
やや とうさんが 一回学校へ来て しっかり  
オシエデケサイテー ウン コイカラデモシラベテ  
と教えてくださいって うん これからでも調べて

ゼンブ アノ カイデオギマスカラテ  
全部 あの 書いておきますからって

66 ウーーン マズイセ

うーん まずね

67 ダカラ トーサンガイッツモサッキモ アンタガダニ  
だから どうさんがいつでもさっきも あなたたちに  
チョットユツテヤケドネ モノダイズィニセーツユーヨリ  
少し言ってやるけどね ものを大事にしなさいって言  
モネ コノヨーニシテコドモマゴサ ネ モノデ  
うよりもね このようにして子供や孫に ね もので  
モツテオシーデイガデキャナラナイトゴドサ  
もって教えていかなければならないってことです  
ネ ワガルデシヨ  
ね わかるでしょ

## 2. 2. 昭和初期の子供たちの遊び

上記の談話には、語り手である玉村栄吾氏(大正15年生まれ、榎法華村在住)の子供時代の遊びが、生き生きと描かれている。遊びの内容として、映画、旗取り、馬乗り、パッチ(めんこ)、剣玉(日月ボール)、竹撒き、竹っこ遊びが語られている。

1) 映画(01~07): 村には映画館がないので、業者が映写機とフィルムを持参して各地を回る巡回映画であった。玉村氏所蔵の当時の写真を見ると、大八車に機器を積み幟を掲げている周りに、大勢の子供たちが群がっている様子が写っている。子供たちのある者は宣伝係りに抜擢され、旗を持って村中に映画の宣伝をして回り、その報酬として入場券を受け取っていた。いわば、楽しみながらのアルバイトである。娯楽の少なかった時代であって、大人の手伝いをしながら楽しみを得、その楽しみをさらに多くの仲間たちと共有するために微笑ましい策略を講じ、それを知ってか知らずか、大人たちは黙認している。まさしく「ノドカ」な「フーシュー」である。

2) 旗取り(08~20): 戸外での遊びの代表に旗取りがある。これは部落対抗(たとえば、元村対富浦)ではなく、一部落内での団体戦であったようである(11)。旗取りは準備段階からの協力(グランド作り(12)、(15))、駆け引き(使いの者を一人ずつ立てての交渉(16))、交渉決裂時の喧嘩(16)、スリリングな本番(17)、終了後の楽しみ(木の実取り(18))などから構成されている。ここには遊びの必須要素がすべて集約されている。プロトタイプ遊びである。

3) 馬乗り(21~27): 屋内での遊びで(神社、体操場(21)、(25))、雨の日や学校の休み時間に行われた。先

に言及した二つの遊びが専ら男子だけのものであったのに較べて、女子も行っていた(24)、(25)。

4) 剣玉(46~48): これを「ニツィゲツボール」と呼んでいた。丹治氏(北海道開拓記念館主任学芸員、渡島地方の民具の研究に従事)は「日月ボール」の字を当てている。剣玉が三つの皿、十字形の柄、木製の球という現在の形になったのは、大正時代からであるそう(広辞苑第四版、岩波書店)。「日月」の名は、おそらく、その形状から由来しているのだろう。

5) 竹撒き(49~50): 四本の竹の棒を握り、ぱっと手を離して、結果に応じてやり取りをする遊びであるが、詳細はわからない。玉村氏自身も思い出せない(述べている(50))。

6) 竹っこ遊び(53~55): これも竹を使った遊びで、表が出るか裏が出るかで競うようだが、詳細は不明である。

この他に、めんこ(パッチ)遊びがある。以上で挙げた遊びは、男子の遊びが中心となっている。同年代の女性の聞き取りも済んでいるので、稿を改めて発表し、本稿の内容を補いたいと考えている。また、5)と6)の竹遊びについても、調査を続けていきたい。

## 2. 3. 伝承

怪異談、伝説、俗謡のような伝承については、談話の中に二箇所言及がある。一つは、「アカシャク」についてで、もう一つは、数え歌についてである。

1) 「アカシャク」(33~41): 玉村氏は船大工をされていた。見習い時代は道南の砂原町で過ごし、その折に、「アカシャク」の言い伝えを聞き、また自身それをこしらえた経験をもっている。「アカシャク」は船に備えてあるひしゃくで、船内に入ってきた水を掻き出す道具である。海には超自然的な怪物がいて、船を沈めようと、ひしゃくを貸すように求めるのである。底の付いたひしゃくを渡せば、船はたちまち水中に没してしまうであろうが、底のないひしゃくであれば、その心配はない。しかも、表面的には海の怪物の命令に従っているのだから、怒りに触れることもない。一石二鳥の知恵である。この種の伝承は、海の仕事に携わる人々の間で広く言い伝えられていて、榎法華特有のものではないだろう。ただし、昭和10年代にはまだ実際に作成していたというのは、興味深い(41)。この伝承も動力船の導入という近代化の波にもまれ、消えていくことになる。



2) 数え歌(51~52、56~57)：一から十まである歌詞のうち、部分的に記憶しているものを採録した。「越後」は方言では「イ」と「エ」の間の舌の高さで発音されるので、「エチゴ」よりは「イチゴ」に近い音に聞こえる。「イチゴ」、「ニイガタ」、「サンジョウ」と「イチ、ニイ、サン」の音がそろっているという偶発的な理由で新潟県にまつわる名称がそろっているのか、この地に着目する必然的な理由があるのかについては、現段階ではわからない。歌詞全部を記録するとともに、新潟県とのつながりを調査する必要がある。

### 3. 中舌母音について

楯法華方言には2種類の中舌母音が用いられている。例えば「海」[t̪i̯ni̯]、ウニ[t̪i̯ni̯]などがある。この二つの中舌母音については、共通語の[i][ɯ]と比べて口腔の中側で発音されると考えられており、時には混同が起こるとされている<sup>(1)(2)(3)</sup>。

楯法華方言の中舌母音の[i]は音素/i/の異音の1つと考えられ、子音と結合して音節を形成する場合に現れる。語頭や母音に後続する場合には[ɛ̞]となる。

- (1) エロ(色) エス(椅子) エギ(駅、息)  
エダ(枝、板)
- (2) コエビト(恋人) ハヤグコエデコエ  
(早く漕いで来い)
- (3) kimi(君) n̄isi(西) kita(北)  
minami(南) n̄isin(鯨)

(1)の例は語頭で子音に先行されない場合を示している。このような場合、エギ(駅、息)エダ(枝、板)のような例は母音の音質上は対立を失ってしまう。しかしアクセントの区別があるので意味の混同のおそれはない<sup>(2)(3)</sup>。(2)の例は、母音に後続する場合で/koi/という連鎖が[koɛ̞]として具現している。これらの(1)と(2)から

- (4) 音節頭の/i/は[ɛ̞]となる

と一般化できる。<sup>(3)</sup>

#### 3.1 音響分析

以下では(4)の妥当性を音響分析によって考察してみることとする。

#### 3.2 方法

サンプルは2節でカナによる記述をしたものから、音

節頭に生じている/i/と、/e/を10例ずつ選択した。

録音はSONY社製DATレコーダTCD-D100、同社製エレクトレットコンデンサマイクロフォンECM-MS907を用い、サンプリング周波数44.1kHzで行った。実施場所は楯法華村の玉村氏の自宅である。録音は、玉村氏に自由に話をしてもらい、その自然談話を録音した。これは音声の自然さを重視したからである。

この音声をSyntrillium社製Cool Edit 2000を用いてサンプリング周波数8000Hzにダウンサンプリングし、それをNTTアドバンテストテクノロジー社製SPWIN Pro Version 2.0bを用いてスペクトル解析およびLPC解析を行い、第1フォルマント(F1)と第2フォルマントの値を求めた。

### 3.3 結果

以下に各母音のF1とF2の値を示す。

表1：音節頭の/i/のF1とF2の値

	F1	F2
i_i ttari	350	2127
i_i ma	365	2223
i_soide	340	1604
i_zu_i bun	341	1902
i_i shi	415	2356
i_ish_i_	435	1662
i_i i13	375	1941
i_danta_i_	502	1788
i_ima	341	2247
i_iwate	314	2354

表2：/e/のF1とF2の値

	F1	F2
e_k_e_n	404	2435
e_nim_ee_	365	2094
e_ee_ga	330	2306
e_tatoeba	428	1568
e_kurundesu	310	2325
e_kokosane	391	2136
e_motte	341	1930
e_dayone	317	2338
e_kenka	321	2024
e_hore	452	1886

表 3: /i/と/e/の F1 および F2 の平均値

	F1	F2
音節頭の/i/	377	2020
/e/	365	2104

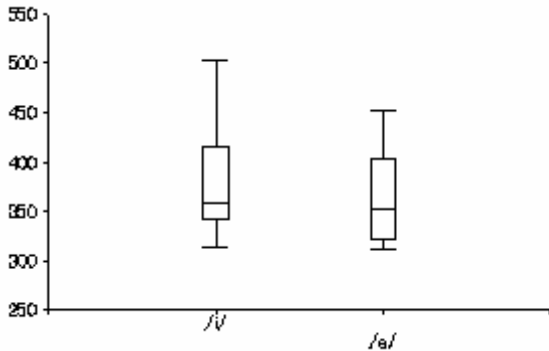


図 1 : /i/と/e/の F1

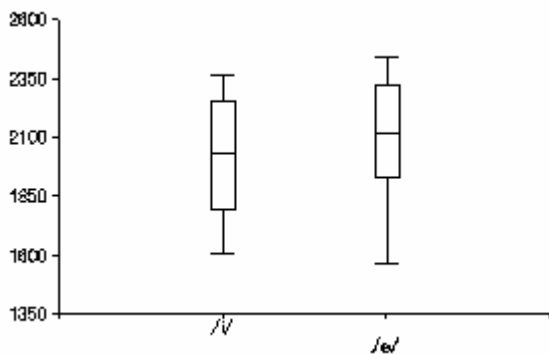


図 2 : /i/と/e/の F2

### 3.4 考察

ここでは平均値をもとに音節頭の/i/と/e/の音質の類似性について考察する。すでに見たように先行研究において、/i/が語頭に生じる場合および母音に後続する場合に/e/と同じように発音されると指摘されている。実際表 3 の F1 と F2 の平均値を比べるとほとんど差が無いことがわかる。平均値の差の検定を行って見たところ、F1 ( $p=0.3134$ )、F2 ( $p=0.2497$ ) ともに有意差が認められなかった。

図 1、2 から、F1 に関しては/i/のほうが数値が大きく、開口度が大きいことが分る。F2 に関しては、逆に/e/のほうが数値が大きく、舌位置が前寄りであることを示している。この差は、統計的優位さは認められないものの、/i/の中舌性に起因すると考えられる。音声学的に見れば、音節頭の/i/にも中舌母音のらしさが窺える。一方/e/は、F1とF2の数値を見ると、[i]に非常に近いと

言える。

これらのことを考える際に考慮に入れなければならないのは、假法華方言において、現在扱っている環境以外では/i/が中舌母音の[i]として具現することである。島田(2003)<sup>6)</sup>において行われた音響分析(N=10)の結果を示すと表 4 のようになる。

表 4: 音節頭以外の/i/の F1 および F2 の平均値

	F1	F2
音節頭以外の/i/	322	1624

表 3、4 の F2 に着目すると舌位置の違いがよく分る。音節頭の/i/と/e/のほうが音節頭以外の/i/よりずっと前寄りであり、[i]に近い。F1の値はどれも大きな違いがないが、若干音節頭以外の/i/の値が小さいので開口度が小さいことがわかる。以上のことをまとめると(5)のようになる。

- (5) /e/および音節頭の/i/は[e]もしくは[i]となる。

このことは(4)の一般化の一部が正しいことを示している。少なくとも音節頭とそれ以外の環境では/i/の現れ方が異なっており、音節頭では中舌母音とならないのは確実である。

問題となるのは音節頭の/i/が、先行研究の主張するように[e]なのかどうかである。少なくとも本稿で行った音響分析によると[i]として記述したほうがよいと思われるものが多かった。もともと[i]と[i]に対立がないので、条件異音として並存可能である。可能性としては/e/も音節頭で[i]として具現するという事も考えられる。

これからの課題としては、先行研究で記述されている[e]が[i]へと変化したのか、それとも[i]が[i]と違う点を捉えはしたものの、母語話者の直感として/i/[i]ということから[i]を[e]として捕らえたのか、明らかにすることがある。この点に関しては、假法華方言の音素体系とその具現の仕方をさらに考察して決定すべきであると考えられる。

### 4. まとめと今後の展望

本稿では假法華村において行われた聞き取り調査の文字データ化とそのデータから得られた風習についての考察を行った。文字データは研究の資料として重要なものであると同時に、假法華村の記録という意味もあ

り、北海道南部地方を地盤とする本学の地元への貢献の一助となると考えている。

今後の課題は二つ考えられる。一つ目は今回紙幅の制約で行えなかった詳細な音声データの解析である。トピックとしては2種類の中舌母音<sup>(4)</sup>や母音の無声化、子音の有声化などがある<sup>(1)(2)(3)</sup>。もう一つは今回新たに得られた数え歌などの由来を解明するために、関係する越後地方の調査が必要である。

### 謝辞

本研究に当たり玉村栄吾氏には調査協力者として長時間にわたるインタビューを快諾して下さったのを始めとして限りない協力を賜りました。この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

また調査協力者の選定、過去の資料の閲覧等に際しては樞法華村教育委員会の方々にお世話になりました。ここに篤く御礼申し上げます。

本研究は平成12年度室蘭工業大学CRDセンターブレ共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の助成を受けている。

### 注

- (1) 島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩野亨著「樞法華（とどほっけ）における言語と風習－失われゆく伝統」室蘭工業大学紀要第51号 pp173-182, (2001).
- (2) 談話記録を書くにあたって、北海道開拓記念館の丹治輝一氏から貴重なご指摘をいただきました。感謝申し上げます。
- (3) このことから/koi/という連鎖が1音節ではなく、/ko+/i/と分割されることが推測できる。

### 文献

- (1) 五十嵐三郎, 北海道方言の概説, 講座方言学4－北海道東北地方の方言－, p1-62, 国書刊行会, (1982).
- (2) 石垣福雄, 日本語と北海道方言, 北海道新聞社, 札幌 (1977).
- (3) 石垣福雄, 北海道沿岸部の方言, 講座方言学4－北海道東北地方の方言－, p63-92, 国書刊行会, (1982).
- (4) 今石元久, 日本語音声の実験的研究, 和泉書院, (1997).
- (5) 島田 武, 樞法華方言の中舌母音について, 認知科学研究第2号, p59-74, 室蘭認知科学研究会, (2003).
- (6) 沢哲夫ほかいどう語－その発生と変遷－, (五十嵐三郎, 長谷川清喜, 佐藤誠, 石垣福雄, 渡辺茂監修),

北海道新聞社, 札幌 (1970).

- (7) 小野米一・奥田統己, 北海道のこぼれ, (北の生活文庫第8巻) 北海道, 札幌, (1999).
- (8) 平山輝男, 小野米一, 石垣福雄, 道場優, 北海道のこぼれ』明治書院, 東京, (1997).

### Appendix

以下に本文でカナ表記した談話を国際音声記号で表記したものを挙げる。ほぼ簡易表記となっているが、中舌化と有声化はそれぞれ補助記号を付加してある。

- 01 taʔoeba hore mʉiʔkaʕi koʔosane ano e:ga  
kʉiʉtʉndestʉjo e:gane
- 02 soieba haʔa modʒitʰtene ʂitorika ʔʉiʔarisʂite haʔa  
moʔʂʉi ʉaʔenansa
- 03 no soide haʔaʉʔo motʰte mʉiradzʉi: ko:  
artʉiʔʉndajone mʉiradzʉi: artʉiʔʉiʔaʔeda
- 04 de soiʔoʔini hore keʕ nime:da: nime:  
samʰme: da: samʰme: kerʉiʔaʔenanoʂe
- 05 daʔedo samai moratara sanʰniʂjoʕi  
hairane:besejo
- 06 soi hoikoso naʔamagaite hore no ʕoʰben  
ʕiniʔkʉiʉnta ʔʉiʔikoite hore no ʉirado aʔeʔeha  
haitʰte mata miʔeʔemone beʔʂʉiʉni maʔa ano:  
oʔoʕimo sine:ndajono
- 07 tada so:ʒʉi:no nantʉiʔkaʕa nodokʔatʉiʉndaʔane  
so:ʒʉi: japʰpaʕi ʔʉi:ʕʉi:ʉa atʰtane
- 08 kodomonokorono asobitʰte ʒʉiebane ano:  
japʰpaʕi jamasa itʰte haʔatoridano
- 09 haʔatori haʔatʰte ʕinomaruʉno haʔatoʔa ano: aida  
10 ʰda soʰde kotʰʔea korene:ʒoniʕeite ma: taʔoeba  
oreʔatʕino ba:ideareba tosanʔatʕino ba:idearebano  
onadzisaʔidemo koʔo moʔomʉiratʰteʔoʔo daʕi  
korekara nikirokʉiʉrai itʰtaʔoʔoni tomijʉiratʰteʔoʔo  
artʉiʔʉiʔʉiʔo
- 11 de tomijʉiraʔarimo ʔʉiʔatani ʉaʔarete  
artʉiʔaʔedabesi
- 12 N madʒine soide mada ʔondo i: nohara artʉinda  
minʰnasite hore kamamotʰtetʰte ʕiratsio tsʉiʔkʉiʔtes  
a  
ʕira ʕira no waʔartʉideʕo
- 13 ma: soitokoronitʉa ʔondo i: isi artʉindabesi soide  
ʔanto haʔa tateteoʔʉiʔaʔesa
- 14 de kotʰtsino dantaitʉa kotʰtsino dantaide motʰte:  
mo: so:ʒʉi:toʔode mata ʉindo:kai jarʉiʉntaha:

- 15 miin<sup>ˈ</sup>na atsuimat<sup>ˈ</sup>te are kosatūinda gūirando  
tsuūkūirūi ūaķejabesi
- 16 soide hore kot<sup>ˈ</sup>tsito sot<sup>ˈ</sup>tsino hoto no tsūikai  
sitorī itarī kitari site no de kono: hore jokūi  
kenka kokūinda<sup>n</sup>dajo:
- 17 soko to:seba sot<sup>ˈ</sup>tsino ho:mo hata torarerūibesi mata  
sot<sup>ˈ</sup>tsi kot<sup>ˈ</sup>tsi to:seba sot<sup>ˈ</sup>tsino hata torarerūibasi no
- 18 soide hore jamani iŋe haŋatorī site de asonde  
tendeni mio tot<sup>ˈ</sup>te no soide ma: jesa kaertūi ma:  
so:jūi: asobidane
- 19 ija betsuūni ne:no
- 20 ma: osoraķūi oraŋatsiūa ma: sona mo<sup>n</sup>dane
- 21 ma: ame ŋūiba dzindzasa haīteno manorī jarūi  
kūire:na monde
- 22 hoton<sup>ˈ</sup>ŋo imantōkōdetūa
- 23 madzi asobi:teba pat<sup>ˈ</sup>tsika omiyasa it<sup>ˈ</sup>te:  
ūimanorīdano:
- 24 nam<sup>ˈ</sup>mo onagosa: no: ka:sanŋatsimo gaktūise:demo  
kek<sup>ˈ</sup>ko: jat<sup>ˈ</sup>tat<sup>ˈ</sup>te ki:ŋetane:
- 25 taiso:bade jastūimidzikan<sup>ˈ</sup>narebane
- 26 tsūinagat<sup>ˈ</sup>tet<sup>ˈ</sup>te ūisirokara kok<sup>ˈ</sup>ko  
hanetēiķūiūaķedabesi
- 27 astūibi:tena ūimanortūika kūirena mondana  
ūimanorīķa pat<sup>ˈ</sup>tsiķa
- 28 so:jūi:no ne:na: ki:ŋakoto ne:na:
- 29 ūiŋšino mūiķogane: iūatekeno to:nokara  
ķiŋtertūndaua
- 30 madzine soide oremo hore ima jūi:ta ko:jūi:  
ohanasistūikidamondakara ne: ano: janagida  
kūiniono to:nomonogaŋari jonde ik<sup>ˈ</sup>kai iktūise:  
iktūise: to omot<sup>ˈ</sup>ta dak<sup>ˈ</sup>ķja: ne: orano mūtūstūmeŋo  
to:mono mūiķosanto iē<sup>ˈ</sup>ŋoni nat<sup>ˈ</sup>tsimat<sup>ˈ</sup>tandamono  
ma: sorega it<sup>ˈ</sup>tesa dzi:butūi imano  
kap<sup>ˈ</sup>pamonogaŋari datoka iroirona so:jūi:  
monogaŋari artūikedo todohok<sup>ˈ</sup>keniūa so:jūi:  
monogaŋariūa ne:na:
- 31 dzasīķiūarasino koto no: dzasīķiūarasini  
nat<sup>ˈ</sup>tsimaūiķedo ki:ŋakoto ne:na:
- 32 ūin soreūa artūarūi
- 33 ŋoto ka:santo hanasi ŋiŋe fūjtondzite koide ŋinto  
ataete kūirebana ano: aida ano: ima jūi:to:ri  
akaŋaķūino ano: akaŋaķūino fūjatsūi  
mot<sup>ˈ</sup>teiķūindatose:
- 34 akakaktūi ano ŋaktūi ano kaktūijatstūine
- 35 soide kondo no aeda hore jamagišino dzi:kara  
ki:ŋandaina:
- 36 oida: hore ano sauŋarat<sup>ˈ</sup>te toķode fūinadeķūi  
mīnaraini<sup>ˈ</sup>t<sup>ˈ</sup>teta<sup>n</sup>daua
- 37 hoide sokode hore ūiŋšide fūine tsūiktūi<sup>ˈ</sup>ta  
ūaķenande:
- 38 demo todohok<sup>ˈ</sup>kemade karekore gorok<sup>ˈ</sup>kiro  
artūimondakara ne onadzi akaŋaķaktūi demone  
ano: fūjatsūi moŋeba i:ndate ŋitotsūiūa hore soķo  
nūiite ŋitotsūiūa sono: akaŋaķaktūi mot<sup>ˈ</sup>te N
- 39 soide hore akaŋaķaktūi kaset<sup>ˈ</sup>tjūi:tarane soko  
nūiijatstūi kaŋiŋejareba ko<sup>n</sup>da midzūi hainendate  
oreŋatsi sauŋarani ite hore kosaetē kosaetā oboe  
artūimon<sup>ˈ</sup>ŋiŋat<sup>ˈ</sup>te
- 40 aķa kaķūino fūjtsūi: aķa kaķūite:ba ano aida ko ko:  
nat<sup>ˈ</sup>te tsūit<sup>ˈ</sup>tsūiite koko kaķūindakedo ne ŋiŋe  
ketstūinoho:iŋa ūiŋanende jat<sup>ˈ</sup>ta mo<sup>n</sup>da:
- 41 so:jūi: areūa artūikedo ma: oraŋatŋi ŋoķūiŋsetsūine:  
mo: oraŋatŋino daiūa ŋo:ūa dzūi: monooboe  
tsūiūanoua dzūi:nenkarane dzūi:nisan<sup>ˈ</sup>nen  
nat<sup>ˈ</sup>teiktūikarataisita: ne do:rjoķūiŋŋane dondon  
hore ko: detekiterūikara ma: imantōkōdetūa  
so:jūi:no ki:takoŋone:na
- 42 ore kone<sup>n</sup>damona ūitsino ka:san<sup>ˈ</sup>ni it<sup>ˈ</sup>ta  
mondakedomo naŋķa mūiķasino ok<sup>ˈ</sup>kane:  
hanasīdatokane naķeba jamakara moŋ<sup>ˈ</sup>ko  
kūirūitokate so soitsa tsūiitejūiķūino ne:kate  
ka<sup>n</sup>dzide hanasiŋejandaua
- 43 ŋakarūi ŋakarūi o:o:
- 44 ima ŋot<sup>ˈ</sup>to ko: kiķaretemona:
- 45 ma: asobīdabane ano iroiro at<sup>ˈ</sup>tane
- 46 madzi oremo ma? kokosa kaiŋakedone ima  
tamairēdak<sup>ˈ</sup>te ko ko:ko: jartūindaine
- 47 ano aida kendama kendamate:noga arene  
ora ŋak<sup>ˈ</sup>koī toķi niŋsigetsūibo:rūt<sup>ˈ</sup>te ne
- 48 niŋsigetsūibo:rūt<sup>ˈ</sup>teūi:tandaua no na arena
- 49 soikara ŋakedomot<sup>ˈ</sup>te jompon tsūiktūi<sup>ˈ</sup>tesa ne soide  
bat<sup>ˈ</sup>to ko: maķūindaina
- 50 sosūiba hore ano no maiŋe are jompon ko: are  
site kondo kot<sup>ˈ</sup>tsino ŋitoua koķosa ŋaķe ko:  
sambon haireba kot<sup>ˈ</sup>tsino ŋitokara sambon  
torūini:ŋi no so:jūi: toķini ano aida ore namŋo  
omoidasiŋemo nakanaka dasene:ndajena
- 51 itsi ni: san si:t<sup>ˈ</sup>te ko: iūane:de itsigono ŋo:kara  
nat<sup>ˈ</sup>to mūiķūireŋaķe nante dzi:t<sup>ˈ</sup>to kono ano  
asokōŋtoķono ni:ŋatano ne ano sanjo: datōķa  
dzi:t<sup>ˈ</sup>to detekūindajone
- 52 <sup>n</sup>da itsigono ni:ŋata sanjotoka ko:ŋat:te jo de oi  
nandzūi:nemo kore hore jat<sup>ˈ</sup>tene:mondaķarane
- 53 are ŋaķeno ko: asobi artūndaua

- 54 kit<sup>ˈ</sup>to antagatauʔa so:ju:ˈno miːtaʔotoaruibeomouˈi  
k̄iːto
- 55 ko:it<sup>ˈ</sup>te taʔe ko:ʔat<sup>ˈ</sup>te ko: omoʔedara omoʔe deʔari  
uːradara uːra deʔa ʧiːtoʔa kondo maʔa ko:  
jaːriːi:k̄uːite soide kondo koresa kondo ano taʔe  
maʔa kot<sup>ˈ</sup>tsi mada dzip<sup>ˈ</sup>paːri mot<sup>ˈ</sup>teruːikara hoide  
miːseteʔat<sup>ˈ</sup>tandauʔa
- 56 soide dot<sup>ˈ</sup>tsika ko: ʧo:haiŋa ano kimareba iːtsigono  
ni:gaʔa sanjo: muːkuːiredake nanda toka kore  
jaːp<sup>ˈ</sup>paːri ano to:made artuːndauʔa kore
- 57 <sup>ˈ</sup>da <sup>ˈ</sup>da kadzoet̄utamitaina jats̄uːi
- 58 hotondone: osoraʔuːi ʧuːi:sengo:mat<sup>ˈ</sup>tekara  
hot<sup>ˈ</sup>tondo mo: iːma ano dzidzino daiʔo: no mo  
dze<sup>ˈ</sup>dzē tsigat̄uːkarane mo: ʧuːi:se<sup>ˈ</sup>gode nam<sup>ˈ</sup>mo  
hotonʔo: nakt̄uːnat<sup>ˈ</sup>tato onadz̄i: mo<sup>ˈ</sup>dane kore
- 59 se:kats̄uːini oʔareʔek̄iʔteruːi kara hore
- 60 so:da so:da
- 61 hore ora edenakat<sup>ˈ</sup>tara ko:ʔat<sup>ˈ</sup>te narabete hore uːi:  
uːiːnt<sup>ˈ</sup>te anta ʧa:nto miːtetanoka sore  
taiʧo:neʔkan<sup>ˈ</sup>no antoki
- 62 de koits̄uːiʔa ano uːsiːronoho:sa ora e:go  
jomene:kara orano ao e:gogak<sup>ˈ</sup>kosa it<sup>ˈ</sup>teruːino  
dza:ˈto jondak<sup>ˈ</sup>kja ano me:dzi jondz̄uːi:san<sup>ˈ</sup>nen<sup>ˈ</sup>no  
suːiek<sup>ˈ</sup>kodat<sup>ˈ</sup>taʔa m: sono toʔidabesa
- 63 ne koremo hore iːma it<sup>ˈ</sup>ta monodz̄uːikidakara hore  
no <sup>ˈ</sup>deʔa mo: ik<sup>ˈ</sup>kaine gak<sup>ˈ</sup>ko:samo it<sup>ˈ</sup>ʔekite:to  
omot<sup>ˈ</sup>teruːinda
- 64 tada gak<sup>ˈ</sup>ko: ataːide mono atsuːibeʔe ne iːma juːi:to:ri  
N:N: tat<sup>ˈ</sup>te hore oremit̄e atama iːmo<sup>ˈ</sup>da  
uʔakar̄uːidade miːna atamano uʔaruːi mombakaːri  
iːtadomo ʧanto kaitoʔeba ʧot<sup>ˈ</sup>tosa miːreba seitosan  
ko: uʔakar̄uːideʧo
- 65 de iːtsuːidaka ano aʔ kjuːi:ni hen<sup>ˈ</sup>na hanasi koitara  
okora: rete simat̄uːina soide artuːtoki jaja to:san  
ik<sup>ˈ</sup>kaiʔak<sup>ˈ</sup>ko:sa k̄iːte: sik<sup>ˈ</sup>kaːri osietekesaite: m:  
koekarademo siːraʔeʔe dze<sup>ˈ</sup>buːi ano  
kaiʔeokimast̄uːikarate
- 66 N: madzise
- 67 daʔara to:sa<sup>ˈ</sup>ga it<sup>ˈ</sup>tsuːimo sak<sup>ˈ</sup>kimo antagatani  
juːit<sup>ˈ</sup>te jak<sup>ˈ</sup>kedo mono daidz̄ini se:ˈtsuːi:joːrimo ne  
konojo:niːsiʔe kodomo magosa ne monodemot<sup>ˈ</sup>te  
osite iːkanekjanaranait<sup>ˈ</sup>tekotosa ne uʔakar̄uːideʧo

以下に表1と表2で用いた単語のリストを挙げる。  
実際に分析した母音は表中のアンダーバーで挟まれたものである。

表1

i_i_tтари	言ったり
i_i_ma	今
i_so_i_de	そいで(=それで)
i_zu_i_bun	ずいぶん
i_i_shi	石
i_ish_i	石
i_i_13	良い(いい)
i_danta_i	団体
i_i_ma	今
i_i_wate	岩手

(表中に「今」と「石」が二度出ているが別の発話である。)

表2

	F1
e_k_e_n	券
e_nim_ee_	二枚(にめえ)
e_ee_ga	映画
e_tatoeba	たとえば
e_kurundesu	来るんです
e_kokosane	ここさね(=ここへね)
e_motte	持って
e_dayone	だよね
e_kenka	喧嘩
e_hore	ほれ